神戸学院大学の学生の皆さん来館

6月14日、神戸学院大学グロ―バル・コミュニケーション学部中国語コースの学生の皆さん17名が、大濱慶子先生と眞島淳先生のお二人の指導の下で来館、事務長の安井から大まかな説明を受けたのち、1時間余、熱心に参観、以下はその参観感想文の一部です。皆さん、興味深く展示を見てくれたようです。なおそれぞれのタイトルは編集員がつけました。(安井)

孫文の書 勢いがあり、とても綺麗

博物館に入ってすぐ孫文が書いた書道の文字が目に入りました。勢いのある文字がとても綺麗だなと思いました。中国人が来てから華僑ができたという

ことを初めて知ることができました。雑居地は日本人が住んでもいいと許可がおりていて、居留地は外国人が住むという違いがあることがわかりました。マッチのデザインが豊富で可愛かったです。中国のそろばんも日本と少し違って大きかったです。

ブルースリーの写真があり、アメリカ出身ということを初めて知りました。獅子舞の写真もあり、昔も今も変わらず中国の伝統芸能として受け継がれていることがわかり、感慨深いなと思いました。

南京町の名前の由来が、江戸時代に渡来してきた中国人達を「南京さん」と呼んだことからつけられたということが、とてもおもしろいなと思いました。横浜は、昔は南京町だったのに中華街になってしまったのが少し残念ですが、神戸は南京町という名前を、そのまま維持していて嬉しいです。

異国でゼロから開拓するバイタリティに敬服

大陸から渡ってきて、異国の地で0から開拓するバイタリティとメンタリティに対して、心の底から尊敬の気持ちが湧きました。自分も0から何かを開拓できるように、活気を持ち、そして小さな歩みを大切にしていきたいです。

解説員の方が言っていた通り、若者は日本の未来に対してしっかり考えていくべきだと思います。多くの人は、土地に対する執着のみで、その土地に対する勉強をしていないと思います。その土地の特色を勉強することは、その土地がどのような歩みで発展してきたのか、その土地がどのような時間を過ごしてきたのか、それを理解することに値すると思います。

これらのことを理解することで、土地や伝統、文化、地域の発展に繋がるんだなと感じました。

大学の授業に直結した展示資料に興味

中国に関する資料館を訪れた経験が無かったので、行くことができて嬉しかったです。簡体字で書かれた資料をみて、友達と、少しですが翻訳し、理解することができました。これまでの授業の知識を活かすことが出来たので、喜びを感じました。

当時の写真や資料などをみて、中国の姿の変化を知ることができました。例えば、タイプライターが展示されていました。私は、初めてタイプライターをみて驚きました。

中国でも、言葉を伝えるための手段とするものが、昔から存在したことに驚きました。中国は領土が広いので、貿易する際やコミュニケーションツールの一つとして、用いられたと考えました。

中国の文化に触れることができ、新鮮に感じました。プロ野球選手の王貞治さんは、中華民国の出身で、お父様が中国の方ということを知りました。中国と日本に関わりのある方がいることを知り、他にもどのような方がいるのか興味を持ちました。歌手のテレサ・テンの「時の流れに身をまかせ」の曲が好きで、初めて聴いた時に日本語が綺麗で中国の方とは思いませんでした。今日、資料を多くみて。日本と中国の関わりに、更に興味を持ちました。

私は、地域学入門を履修しており、華僑について学びました。その事もあって、今日の華僑・華人や南京町などの内容は聞き馴染みがある内容でした。しかし、中国と神戸の関わりはとても深く、歴史が長いことを改めて知りました。自分の語学力を伸ばしたいと考えました。それらの固い繋がりに触れていきたいです。そのために、私は中国の音楽を聴いて、リスニング力を伸ばしたいと考えました。

中国の獅子舞を資料でみて、春節祭に行きたいと思いました。中国を知れば知るほど、中国に行きたくなりました。早く中国に行きたいです。そのために、中国語の習得はもちろんですが、中国の歴史や価値観の理解を深めるために、これからの授業を受けたいと考えました。

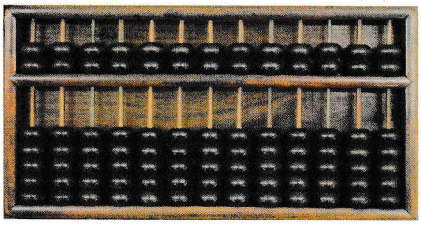
▲画像は当館展示物　編集員撮影

展示品が新鮮でワクワク!

今回は華僑博物館を訪ねることができました。今まで、中国に関する博物館に行ったことがなかったのでとても新鮮でワクワクしました。入った瞬間から獅子舞の置物や男性用の昔着ていた服が飾られておりました。そのお洋服触ってみたんですけど、思ってたよりも分厚くて裏起毛となっていて日本に比べて寒い中国でも耐寒できそうなくらいになっていてびっくりしました。そして今の日本の在留外国人では中国人が一番多いと聞いて、驚きはしませんでした。なぜなら生活していく中でとても実感できるからです。大阪や神戸などの都会に行くと必ず中国人の会話が耳に入ります。日本の中でも兵庫に在住している中国人の数の順位は多い方です。神戸の華僑は昔から中国と貿易をしていたためで、その象徴となるのが南京町です。なので南京町はとても古い歴史を持っており、有意義な場所だということを改めて知ることができました。他にも今まで見たことの無いものや気になっていて実際にみてみたいと思っていたものを見れてとても良い機会になり勉強になりました。

南京町今昔 その変貌に驚く

今回の授業でもっと昔のことを知りました。私は、初めて中国に関する博物館に行きました。博物館に置いてあるものを見れてとても嬉しかったです。昔からよく中国のテレビで中国の古い電話やそろばんが映っていて直接見てみたいなと思っていました。博物館の中に置いてあって最高でした！思ってたよりも倍でかかったのでびっくりしました。今のそろばんは小さくてやりやすいんですけどでかいソロバンの方が難しそうだなと思いました。機会があれば触ってみたいです。南京町の昔の写真が沢山置いてあって全部一つ一つ見て行ったんですけどいまと全然違っててすごいと思いました。



一ヶ月前、南京町に行った時、小籠包がめちゃくちゃ人がいて結構列ができていて私も食べたかったけどさすがに待てないなと思い食べれなかったんですが、博物館においてある写真と作文？にそのお店の名前が書かれていて読んだんですけどそのお店が南京町で一番最初にできたお店だったことを知りました。それを見た瞬間「あ、そういうことか、だからあんなに並んであったのか」と思いました。この前は食べられなかったので次、南京町に行った時に並んで食べてみたいです。

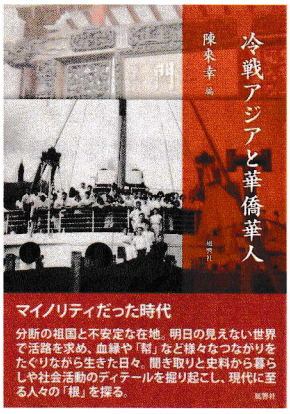
在留外国人の表に興味

この神戸華僑歴史博物館は、陳徳仁により 1979 年に建てられた博物館である。私は華僑という単語を初めて聞いた。華僑とは、中国本土から海外に移住した中国人かつ居住国の国籍を所得していない人のことだ。居住国の国籍を所得している者は華人という。博物館には、紙に筆で書いたものや、壺のようなものなど、さまざまなものが置いてあった。私は神戸と海外の関係について全く知らず、博物館で資料を見て、こんなにも歴史や繋がりがあるものなんだと驚いた。

2022 年 6 月に統計された在留外国人の表では、中国の人は東京が多かった。その在留外国人の総数は、47 都道府県のうち、東京都が1位、兵庫県が7位、私の出身地である三重県は14位だった。表を見ると、三重県にはブラジル人が多かった。私の実家の近所は、中国人とフィリピン人が住んでいたので、その2カ国の人が多いのかと思っていたが、この表を見ると私の周りに多かっただけだったことが分かった。

新著紹介

陳來幸編『冷戦アジアと華僑華人』（風響社）

- A5判並製・476頁
- 定価：本体4000円＋税
- ISBN：9784894893382
- 2023年3月刊行

※第１章　安井三吉「戦後日本の社会運動と華僑」／第３章　蔣海波「大阪川口居留地と華僑社会の形成」／第5章　陳來幸「戦後冷戦初期日本の華僑学校の再建をめぐる抗争――国共による争奪戦か地域の競争か」／第7章　岡野（葉）翔太「中華民国派華僑組織の形成と台湾外省人（一九五〇―六〇年代）」／第14章　易星星「冷戦初期における上海商業儲蓄銀行の海外展開の紆余曲折」　（葉）